

平成 30・31 年度 教育研究課題

子どもたちの今と未来の幸せをねがって
～一人一人の豊かな育ちを支える質の高い幼児教育を～

公益財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構

主題

子どもたちの今と未来の幸せをねがって

～一人一人の豊かな育ちを支える質の高い幼児教育を～

◆課題

重点課題 (1) 幼稚園教育要領の改訂に関連して

(2) 3歳未満児の発達並びに保育及び家庭教育の支援

(3) ^{イーセック}ECEQ (公開保育を活用した幼児教育の質向上システム) の実施
～教育・保育の質を高める～

(4) ミドルリーダーの養成

課題1 愛されて育つ子ども [研修俯瞰図 A分野]

課題2 子どもと共に育つ保育者 [研修俯瞰図 B分野]

課題3 教育・保育理論 [研修俯瞰図 C分野]

課題4 子ども理解 [研修俯瞰図 D分野]

課題5 保育実践 [研修俯瞰図 E分野]

課題6 子どもが育つ家庭や地域 [研修俯瞰図 F分野]

特別分野

●各地区独自の課題

※研修俯瞰図とは、「保育者としての資質向上研修俯瞰図」(同封別紙参照)である。

研究主題を設定するにあたって

公益財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構
研究研修委員長 宮下友美恵

幼児教育のこれまでの歩み、現在、そして未来を考えたとき、その中心にある存在はいつも「子どもたち」です。

そして、幼児教育に携わり、子どもたちと共に日々生活する私たちが願うこと、それは「子どもたちの幸せ」です。

このことは、たとえ時代が変わっても、けっして変わることがない幼児教育の原点です。

子どもたちにとって幸せとは何でしょうか。健康で心が安定し、ありのままの自分が愛されているという実感をもつこと。人は信頼できる存在であり、まわりの人と共に生きることが楽しい、うれしいと感じること。そして、興味のあることに夢中で取り組む中で、自分の力を十分に發揮し、大好きな人とその喜びを共感できることではないでしょうか。

子どもたちが大人になっていく過程の中で、社会はこれまでとは比較にならない程のスピードで劇的な変化をしていくことでしょう。この先、情報化、グローバル化がさらに進み、人工知能が発達し、今ある職業の半分以上が新しい職業に変わるであろうと言われています。そのような時代の中で、一人一人が自分のよさや可能性を認識し、周りの人の人格を尊重し、互いに支え合い協働しながら社会的変化を乗り越えていく。そして自分の役割を果たし、心豊かな生活を創り出していくことが人としての幸せにつながると思います。

教育という営みは、未来というベクトルを見据えながら行われるものではあります。その未来は「今この時」の積み重ねによって創り上げられるものです。子どもたちの今の充実、今の幸せが、その時々で育まれるべき力を育み、それが未来の幸せにつながっていくのだと考えます。一人一人が幸福な人生の創り手となることが、私たちの願いです。

そのような趣旨のもと、平成30・31年度の教育研究主題を

「子どもたちの今と未来の幸せをねがって～一人一人の豊かな育ちを支える質の高い幼児教育を～」としました。

平成29年3月31日に新しい幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が告示され、平成30年度からはそれに基づいた幼児教育が実施されます。今回の改訂では「環境を通して行う教育」を引き続き基本とし、幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されること、幼児の自発的な活動としての遊びを通して一人一人に応じた総合的な指導を行うこと等が重視すべき事項として示されています。

また、新しい時代に必要とされる資質・能力を踏まえ、幼稚園教育において育みたい資質・能力として「知識及び技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」、「学びに向かう力・人間性等」の3つの柱が示されました。近年、国際的にも忍耐力や自

己制御、自尊心といった社会情動的スキルやいわゆる非認知的能力といったものを幼児期に身に付けることの重要性が指摘されています。そのような中で、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿も示され、幼稚園等における各年齢にふさわしい指導の積み重ねが幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につながっていくことや、幼児期に育まれた資質・能力が小学校以降の教育で育みたい資質・能力へと積みあがっていくことが共通認識されました。これからは、幼児教育と小学校教育との接続がさらに重要なってきます。

子どもたち一人一人の豊かな育ちを支えるものは、質の高い幼児教育です。公益財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構では、これまで「保育の質」という重要なテーマについて研究研修を続けてきました。教育研究課題の研究主題を平成24年度より「広く、深く、ていねいに保育の質を考える～保育臨床の視点を大切にする研修と研究を進めよう～」、平成26年度より「子どもの『今』に寄り添い、子どもと『未来』をきずく～保育臨床の視点を大切に、保育の質を高めよう～」、そして、平成28年度より「人生のスタートにこそ良質な教育を～保育臨床の視点を大切に、保育の質を問いつづけよう～」とし、私立幼稚園・認定こども園における「保育の質の向上」を目指して研究研修を進めてきました。

幼児期の教育は生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであるという認識が縦断研究等で明らかになってきている今、私立幼稚園・認定こども園において、質の高い幼児教育を実践していく責任はますます大きくなっています。質の高い幼児教育を実践していくためには、各園が建学の精神、教育理念、そして幼稚園教育要領等を基にして、社会に開かれた教育課程を編成し、それを実施し、評価し、改善を図っていくことが極めて重要です。

当機構では、幼稚園教育要領等の改訂に関連した課題、3歳未満児の発達の理解を基盤とした保育と家庭教育の支援についての課題、幼児期にふさわしい評価とそれを支えるECEQ(公開保育を活用した幼児教育の質向上システム)実施についての課題、園の教育運営の要となるミドルリーダー養成の課題等を重点課題としました。そして、質の高い幼児教育の実現に向けた様々な研究課題を、研修俯瞰図のカテゴリーに沿って編纂しました。

教育現場の実践者はもとより、子どもたちの幸せを願うすべての人々が、様々な場において本研究課題を広く活用し、活発に議論してくださることで、日本の幼児教育の質がさらに充実・向上し、子どもたち一人一人の豊かな育ちと生きる喜びにつながりますことを切に願っています。

重 点 課 題

（1）幼稚園教育要領の改訂に関連して

平成29年3月に新しい幼稚園教育要領が告示された。改訂のポイントは、大きく2点ある。1点目は、幼稚園教育において育みたい資質・能力、「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」の明確化、幼児理解に基づいた評価の実施、特別な配慮を必要とする幼児への指導等「総則」を改善・充実している点である。2点目は、近年の子どもの育ちをめぐる環境の変化等を踏まえ、「教育内容」を改善・充実させた点である。

幼稚園教育要領改訂の折には、どこが変わったのかという点に目が向がちであるが、「不易流行」という観点から、まず変わらなかつたことについて意識を向けておくことが大切である。幼稚園教育要領では、これまで「環境を通して行う教育」を基本とし、幼児の自発的な活動としての遊びを中心とした生活を通して、一人一人に応じた総合的な指導を行ってきている。この基本的な部分については、今後も各園が正しく理解して保育実践ができるように意識して取り組んでいく必要がある。

一方で、1) 社会状況の変化等による幼児の生活体験の不足等から、基本的な技術が身についていない場合があること。2) 幼稚園教育と小学校教育との接続では、子どもや保育者の交流は進んできているものの、教育課程の接続が十分であるとはいえない状況であること。3) 近年、国際的にも忍耐力や自己制御、自尊心といった社会情動的スキルやいわゆる非認知的能力といったものを幼児期に身に付けることが、大人になってからの生活に大きな差を生じさせるという研究成果がでており、OECD諸国においても幼児教育の重要性の認識が高まっていること。等の背景があつて改訂が進んできた。改訂の研修企画においては、これらのポイントを押さえ、語句の解釈だけでなく、これから幼稚園教育に求められている背景も含めて理解し、幼稚園において具体的に質の向上を図っていくための視点をしっかりととるようになつた。

「カリキュラム・マネジメント」を一例としてあげる。幼稚園教育においては、育みたい資質・能力の実現に向けて、子どもの姿や地域の実情等を踏まえつつ、「どのような教育課程を編成し、実施・評価し、改善するのか」という一連の流れをカリキュラム・マネジメントとして確立することが求められている。幼稚園は教科書のような教材を用いることなく、環境を通して行う教育を基本としているので、目標の設定については、各領域のねらいを相互に関連させ、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置きながら、幼児の調和の取れた発達を目指していく総合的な視点が必要となる。その目標の達成のためには子どもの姿を捉えることが必要であり、子どもの育ちの姿からカリキュラムも改善が図られる。このような仕組みを構築していくためには、園長のリーダーシップのもとで、全ての保育者が参画することが大切になってくる。すなわち、各幼稚園では実践とカリキュラム・マネジメントが一体となって進められるようになっていくことが求められているのである。そのために構造の理解と具体的なやり方を、分かりやすく伝えたり、演習したりすることが必要となってくる。

加えて、今回の教育要領の改訂を機に、私たちはより良い教育実践をさらに目指すと共に、保護者や地域への幼児教育推進のための啓発も大切にしていきたい。

「総則」の改善・充実部分のポイントは、以下の4点である。これらの視点を踏まえて、研修を企画立案していくことが大切である。

- ① 幼稚園教育において育みたい資質・能力を「知識・技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力の基礎」、「学びに向かう力・人間性等」として明確化しているので、それぞれの意味の理解を促進する。一方で、「環境を通して行う教育」を基本とすることは、変わらない大切なポイントとしておさえておくことが必要である。
- ② 幼稚園修了までに育ってほしい具体的な姿が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として示された。これにより幼稚園教育で育つ姿から、小学校教育につながる道筋ができ、幼小接続がスムーズにはかられることが期待されている。一方で、この育ちの姿は幼稚園等での教育環境から育まれてほしいという姿であって、個々により表れ方は様々であるから、ひとつの物差しを全員に当てはめて、出来ている・出来ていないという評価ではないことを周知し、小学校や行政においても誤解なく連携が進むようにしたい。
- ③ 評価については、幼児一人一人のよさや可能性を把握する等幼児理解に基づいていることが前提である。また、上記②に示した子どもの育ちの姿は、園自己評価の視点としても大切にする必要がある。
- ④ 障害のある幼児や海外から帰国した幼児等の幼稚園生活への適応等特別な配慮を必要とする幼児への指導の充実が求められている。この分野についても研修を促進したい。

（2）3歳未満児の発達並びに保育及び家庭教育の支援

良質な幼児教育を行うためには、それまでの発達の特性や発達の過程を理解し、3歳以降の教育につなげることや、学びの基盤とされる非認知的能力が形成される乳幼児期に、豊かな環境で学ぶことの大切さを理解しておかなければならない。3歳未満児の保育を行う認定こども園においては、この時期が愛着形成を基盤とした情緒の安定や他者への信頼感が醸成される大切な時期であり、また子ども一人一人の発達の特性や個人差が著しい時期であることを踏まえ、個に応じた保育を丁寧にしていくことが求められる。そのためには、一人一人の成育歴や心身の発達に即した個別の指導計画を作成することが必要となる。子どもが安心して遊んだり生活したりするための保育者の関わりや、子どもとの信頼関係を築く保育の在り方について理解する必要がある。そして幼稚園においても、個人差や成育歴が違う子どもたち一人一人の発達過程を理解し、長期的な見通しに立った質の高い教育を実践する必要がある。

また、幼稚園や認定こども園は、家庭での子育てを支援するという幼児教育センター的役割も担っている。地域の保護者への子育て相談や保護者同士の交流の場の提供、地域の子どもたちの成長や発達を促す場としての役割等が期待されている。不安や孤独を感じながら子育てをしている保護者がいることを理解し、安心して子どもを育てられるような支援や保護者同士のつながりを促す場を提供することが求められている。

そのためには、在宅で子育てをしている保護者が抱えている現状や課題等を把握しておくことが大切である。

このようなことを踏まえて、各地区の研修会において3歳未満児の発達並びに保育及び家庭教育の支援についての学びを深めていただきたい。

(3) ^{イーセック} (公開保育を活用した幼児教育の質向上システム) の実施～教育・保育の質を高める～

幼児期の教育は生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであるという認識が高まっている今、幼稚園や認定こども園において、一人一人の豊かな育ちを支える質の高い幼児教育が行われることはきわめて重要である。

公的な教育を担う幼稚園等において、学校評価を推進し園運営の改善や教育の質向上を図ることは、園の活性化や信頼される園づくりにつながるものと考える。

当機構では、幼稚園等が公開保育を実施し、外部の視点を導入することによって自園のよさや課題を見つけ、教育実践の質向上につなげる学校評価実施支援システムの開発を進めてきた。

平成29年度からは、このシステム Early Childhood Education Quality System の頭文字を取って ^{イーセック} ECEQと呼称することとし、この取組みのさらなる普及を目指している。

ECEQは、私立幼稚園としての理念や地域事情の違い等に配慮しつつ、幼稚園教育要領等の理念に基づいた教育という視点を大切にし、ECEQコーディネーターと共に下記のステップを踏みながら実施するものである。

STEP 1 ヒアリング・打ち合わせ

事前訪問により公開園が安心して公開に臨むことができるよう、園長や主任等に対しECEQについての説明をしたり、ヒアリングを行う。

STEP 2 事前研修

保育者自身が考える園のよさや課題について園全体で共有するためのワークをECEQコーディネーターと共にを行う。

STEP 3 公開保育へ向けての準備

園の課題を参加者と共有するための「問い合わせ」作りへ向けての園内研修を行う。

STEP 4 公開保育当日

問い合わせの視点をもって保育を参観し自分の意見を付箋に記す。午後からの分科会では付箋をもとに協議を行う。

STEP 5 振り返りの園内研修

公開保育において参加者から得た意見等をもとに、振り返りの園内研修を行う。

^{イーセック} ECEQ (公開保育を活用した幼児教育の質向上システム) は一定の地域内で近隣の私立幼稚園が協力して保育の公開を行い、自園の教育実践のよさを再確認したり、これから取り組むべき課題を明らかにしたりすることから始めるものであり、公開保育を実施することが目的ではない。公開保育後の分科会の実施により、参加者と共に保育を語り合うことを通して保育という営みを深めることができるものであり、その後の

園内研修においても保育を語ることを通して同僚性を高めながら、教育の質向上につなげるものである。

ECEQを実施することをきっかけとして、保育を語ることができる保育者を養成することにより、それぞれの園の教育・保育が充実し、真に幼児教育の質向上につながるために、全国の園における積極的な実施を期待したい。

(4) ミドルリーダーの養成

幼児教育の質が生涯にわたる幸せにつながることが明らかになり、それぞれの園は教育・保育の質のさらなる向上、充実が求められている。

一方で預かり保育等の保育の長時間化や子育て支援等の多機能化が進み、その結果、常勤の保育者だけでなく、非常勤の比率も高くなってきた。また園において、外部の専門家を含めた様々なチームを形成して教育実践を行うようになってきた。多機能化した園の質の向上のためには、園長をはじめとして保育者がチームで対応する力や地域や社会の多様な組織等と連携・協働できる力が期待されている。リーダーがチームとなって、自主的、自律的な教育の質の向上を図るためには、それぞれの分野のリーダーシップの発揮や組織マネジメントの導入が期待されている。

従来幼稚園では園長が強いリーダーシップを発揮することが大切とされ、運営、計画、指示、指導等あらゆる面で園長中心としたトップダウンで保育者やスタッフがその方針に従うモデルが良いとされてきた。しかし最近の研究では、1人の強いリーダーの園より、多様なリーダーが分散して存在する協働的リーダーの多い園の方が保育の質が高いという結果がでてきている。職務のあらゆるところに適切な知識や専門的技術をもち、園や学年等のチームを導き、同僚性をもって変化や新しい課題に挑戦する力のあるミドルリーダーの存在が不可欠となってきた。すなわち、トップダウン、ボトムアップよりも、分散的・協働的リーダーシップモデルという園全体でビジョンや価値を共有し対等に学びあい、新しいことに挑戦したり変化したりしていく園組織が求められている。

制度の変化や幼稚園教育要領の改訂等の機会を捉え、挑戦と向上を維持できる質の高い教育・保育を安定的に提供していくため、省察に基づくカリキュラム・マネジメントの継続、同僚性による専門性の育成、チームとしての幼稚園文化の醸成、保護者と協働等、組織の機能を活性化させるキーパーソンであるミドルリーダーの役割とその在り方について探っていく必要がある。

愛されて育つ子ども

(研究・研修のテーマ例)

- 幼児期からの人権教育を考える
- いのちの大切さを学ぶ保育
- インクルーシブ教育・特別支援教育の在り方
- 多様な子どもの受け入れとクラス集団の育ち
- 子どもの健康な心と体を育む食育を考える
- 子どもの安全を守る保育と環境
- 園の安全管理体制・危機管理体制を考える
- 愛着形成と心の育ち
- 各地区独自の課題

■研究・研修の視点

子どもは、一人一人それぞれに違う存在である。しかし全ての子どもに共通していることは、その子にふさわしい生活を送ること、自分の人生を主人公として生きる権利をもっているということである。一人の子どもがこの世に生を受けた瞬間から、愛情に包まれた環境で育つことは健全な成長には不可欠なことであり、この愛情に包まれた空間は、親子・家庭環境から始まり保育実践の場へつながり、親・子・保育者間で子どもの育ちを真ん中にして保たれていかなければならない。乳幼児期から、親や家族、そして保育者にありのままを受容され、愛される経験を十分に重ねることで、子どもは自分をかけがえのない存在であるという自信を持つようになり基本的な信頼感を獲得する。これはその後の人間関係形成力の基礎となる。

子どもは幼稚園という環境の中で、様々な「ひと・もの・こと」と出会い、関わりながら学んでいく。わくわくするような体験や、美しさ不思議さを感じ取るような、内面を揺り動かされる体験を通して感性が磨かれ、心が豊かに育まれる。保育者の優しい眼差しや温もり、応答的なやりとりの中で丁寧に育まれたクラス集団においては、一人一人の「いのち」と「育ち」への受けとめが確かなものとなり、自己肯定感が醸成されていく姿が見られる。

また、子ども同士の深まった関わりの中で起こり得る葛藤や自己実現を繰り返しぐりぬけることで、友達同士認め合う関係性も築かれていき、その関係性のなかで、自己も他者も尊重するという思いやりの核となるものが培われる。については、障がいのある子どもを含めた一人一人の違いを受け入れながら育ち合う姿も見られるようになる。保育者は一人一人の教育的ニーズにあった適切な支援を行いながらインクルーシブ教育を進めることが大切である。

子どもへの食育は、生涯にわたって健全な心と体を培い豊かな人間性を育んでいく基礎となる重要なものである。十分に体を動かして遊ぶ心地よさを実感することで、体を動かす意欲が育ち、空腹を経験し美味しく食事を取るようになる。その結果、食材や調理してくれる人への感謝の気持ちも育まれていくものと考える。

幼稚園においては、和やかな雰囲気の中で保育者や他の幼児と食べる喜びや楽しさを味わったり、様々な食べ物への興味や関心をもったりする等、進んで食べようとする気持ちが育つように配慮していくことが大切である。また家庭において、子どもが

一人で食事をしたり、いつも同じものを食べたり、欠食がある等、子どもの食生活の実情を踏まえながら、望ましい食習慣を身に付けていけるよう、家庭との連携のもと一人一人の発達過程に応じて指導したり、保護者への正しい情報提供や食育の普及啓発が求められている。

子どもが安心安全に生活するためには、園における安全指導が必要となる。子どもの生命を尊重し、安全を確保するための能力を育てるための取組みを家庭と一体になって進めることが大切で、危機的状況が発生した場合には、子どもたち自身も自らを守る行動が取れるように育てることが求められる。同時に幼稚園等においては、安全管理マニュアルや危機管理マニュアル等の質の向上を目指して、安全管理と危機管理の在り方を探り体制を整えていく必要性があり、想定外の危機に対する臨機応変な対応が求められている。

【研究・研修の手がかり】

- ① 子どもの権利が守られた園生活の在り方や、そのために必要な家庭との連携について考える。
- ② いのちの尊厳を学ぶ保育内容について実践事例を通して考える。
- ③ 子どもが園生活の中でいのちを感じたり学んだりする環境について、実践事例をもとに考える。
- ④ 互いに育ちあうインクルーシブ教育について具体的な事例を通して考える。
- ⑤ 子どもの健康な心と体を育むために必要な活動や体験とはどのようなものか考える。
- ⑥ 食についての今日的課題を踏まえ、健康な心と体を育むための食育や家庭との連携について考える。
- ⑦ 救急法を学び、感染症・伝染病への対処・健康記録の整備と活用等の実務的な研究研修に取り組む。
- ⑧ 事故・災害等の緊急時対応マニュアル・安全管理マニュアル・危機管理マニュアル等の見直しについて考える。

子どもと共に育つ保育者

(研究・研修のテーマ例)

- 主体的に学び続ける保育者
- 人間性豊かな保育者の育成
- 幼児理解に基づいた評価の実施
- ECEQ を活用した保育の振り返り
- 自分の得意分野をもち、保育に生かす
- 保育を語れるリーダーの育成
- 仕事の効率化と組織の活性化
- 自園の教育理念や教育課程の理解
- 教育課程の編成と評価・改善
- 同僚性を育むコミュニケーション
- 保育者のメンタルヘルスと仕事に対する向上心
- 各地区独自の課題

■研究・研修の視点

幼稚園教育は環境を通して行う教育であるが、保育者自身も大切な環境の一つである。人間性豊かな保育者のもとで、子どもは安心感や安定感をもちらんながら園生活を送ることができるようになる。また、保育者は主体的な活動を通して子ども一人一人が着実な発達を遂げていくために、子どもの活動の場面に応じて様々な役割を果たしていく必要がある。そのためには、子どもの心に寄り添い、子どもと共に育つ保育者でなければならない。幼児期に豊かな遊びを経験することはとても大切なことである。園における様々な活動の充実を図ることは、義務教育及びその後の教育の基礎、さらには生涯にわたる人間形成の基礎を培うものである。幼児期における遊びと生活が重要であると考えると、保育者もまた遊びと生活を創り出す専門家でなくてはならない。自らの経験を豊かなものにすることは、子どもの遊びを深め充実させることにつながる。

また、個々の保育者が園における自分の役割を理解し、組織の一員としての自覚をもつことが重要である。そして、子どもの立場に立って考え、共に学びながら子どもの内にある可能性を引き出すことができる指導力と豊かな感性が求められる。保育者は自身の態度、言葉、表現、動作の一つ一つが、子どもたちに計り知れない影響を与えていていることを自覚して、保育にあたらなければならない。

保育者は、子どもの理解者であり、子どもから信頼される憧れの存在であり共同作業者でもある。そして、子どもと共に生活を創り、楽しみ、育ち合う存在なのである。

ECEQ 等を積極的に活用することで、自園のよさを再認識し、さらに自園の課題を発見し保育の質の向上につなげていくように、保育を振り返るためのツールとして様々

な評価方法を知り使いこなすことも必要である。個々の保育観だけではなく、園全体の課題として常に自園の教育・保育理念や教育課程を理解し、それを実践につなげていくことが重要である。それには保育者同士が互いに認め合い育ち合う関係が築かれていることが大切になってくる。また、同僚性を育むためには話しやすい雰囲気を作ると共に、保育者一人一人の思いや悩みを理解するメンター的人材育成も重要である。

子どもたちの人間形成の基礎に大きく関わる私たち保育者は、これからも園内園外研修を断続、充実させ、子どもたちと共に園全体の教育の質の向上に努めていきたい。

【研究・研修の手がかり】

- ① 子どもたちの多様な姿を読み取り、理解を深めることは、保育者としての資質向上につながる大切なことである。子どもの心に寄り添い、幼児理解を深めていくための様々な手法について考える。
- ② 子ども一人一人の発達の理解に基づいた評価を実施するために、どのような配慮が必要であるか、実践事例をもとに考える。
- ③ ECEQを活用し保育を互いに見合うことは、保育理解や同僚性を高めるために有効な手段である。保育や子どもの姿について様々な観点で語り合うことのできる研修の在り方を考える。
- ④ 自園の教育課程をどのように編成し、それをどう実践につなげていくのか、各園の取組みをもとに協議し合う。さらに、教育課程の評価や改善の方法についても考える。
- ⑤ 保育者一人一人が自らの持ち味を理解し、互いにそのよさを認め伸ばし合いながら、園の教育の質向上にどう貢献できるか考える。

教育・保育理論

(研究・研修のテーマ例)

- 発達の連續性を踏まえた幼児教育理論
- 0・1・2歳児（乳児期）と3・4・5歳児（幼児期）の生活と育ち
- 愛着の形成
- 社会性の育ちと規範意識の育ち
- 幼児期の学び
- 日本の教育・保育制度と世界の教育・保育制度
- 現代の教育・保育制度の課題
- 幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育指針の変遷
- 各地区独自の課題

■研究・研修の視点

子どもの発達は、一人一人個人差があるが、大きく捉えると順序性や段階が見られる。幼児教育は子どもの発達を捉えた各園の教育課程に沿って行われているが、その背景は西洋で生まれた思想や日本で独自に発展した思想、最新の発達理論により構築されている。

保育者が教育についての歴史をひも解き、諸外国の制度や最新の発達理論を学ぶことは、子どもの育ちへの深い理解や援助の精神的、哲学的な柱をもつことにつながる。

保育者は個々の子どもの発達や成育環境を考慮しながら、一人一人に応じたより良い幼児教育、質の高い幼児教育を実践することが求められている。そのためには幼児についての深い理解が大切になってくるが、加えてその前段階である乳児の育ちや最新の発達理論を学ぶこともまた必要である。

幼稚園等は小学校の前倒し教育を行なっているのではなく、幼児期ならではの学びや育ちを保障した教育を行わなければならない。その上で、幼児期の学びと育ちを児童期にどうつなげていくか、長期的な見通しをもつことも大切なことである。

また幼児は、意図的な環境のなか、様々な仲間と触れ合い、自分の思いを主張し、相手の思いを受け入れる体験を通して折り合いをつける経験をし、人間関係を構築する手立てを身につけていくと共に、他者のよさに気づき、自分との違いを理解することで人間関係を深め、伝え合い、協力し合って学び合うようになる。また保育者は、一人一人の発達の特性に応じながら、どの子も認められ、受け入れられていくような幼児教育を考えることが必要である。成長に合わせて子どもたちが主体性を十分に發揮できる環境を整備し、子どもと共に遊びや生活を展開していく中で、応答的に、柔軟に環境を再構成していかなければならない。

近年、子どもを取り巻く環境が大きく変化する中、OECDでは2001年より、「人生の始まりこそ力強く」と題して5回にわたる報告がなされ、乳幼児教育への公的投資が

社会政策としても効果が大きいことを示しており、ノーベル経済学賞受賞のヘックマン教授の研究でも、幼児教育への投資が社会全体にもたらす経済効果は、その後の就学期、就学後への投資よりはるかに大きいとしている。またヘックマン教授の研究は非認知的能力の重要性も訴えており、幼稚園教育要領等の改訂では「学びに向かう力・人間性等」として、育みたい資質・能力の一つとして取り上げている。さらには法案の成立が望まれる「幼児教育振興法」においても、「全ての子供の健やかな育ちを目指し、質の高い幼児教育の実現のための幼児教育の振興に取り組むことは、社会において最も重要な課題の一つ」であるとしている。

このように制度や政策といった社会情勢にも後押しされて、質の高い幼児教育が求められている私たちは、実践に裏打ちされた理論を構築することで、幼児教育の重要性を保護者ならびに地域、社会に発信していくことが求められている。

【研究・研修の手がかり】

- ① 発達の連続性を考慮したうえでの教育・保育の在り方、子どもの生活や育ちについて考える。
- ② 乳幼児の発達に即した教育・保育を行うための環境の構成を、乳幼児の発達理論を基に考える。
- ③ 幼児期の学びを豊かにしていくための環境について考え、遊びや生活におけるどのような経験が子どもの学びとなるのか、理論と照らし合わせながら考える。
- ④ 幼稚園教育要領等、三法令の変遷を学ぶ。
- ⑤ 幼稚園教育要領等の改訂に際して「ねらい及び内容の改善・充実」された部分についての理解を深める。
- ⑥ 制度・社会・地域・家庭等、子どもを取り巻く環境の変化の中で、子どもの育ちを支える教育・保育の在り方について考える。

子ども理解

(研究・研修のテーマ例)

- 幼稚園教育において育みたい資質・能力の視点から子どもの育ちを捉える
- 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた保育実践
- 保育の記録と保育の振り返り
- 子どもの発達の理解と保育実践
- 子どもの内面理解（受容と傾聴）
- 子どもの育ちを共有するための様々な記録とその活用
- 子ども一人一人のよさや可能性の把握
- 子どもとの温かい信頼関係の構築
- 集団としての育ちと個の育ち
- 特別な支援を必要とする幼児への個別の指導計画と家庭や関係機関等との連携
- 各地区独自の課題

■研究・研修の視点

子ども理解は、子どもを見つめ、一人一人の内にある可能性に保育者が気づくことから始まる。

子どもは環境との相互作用の中で、自分の興味や欲求に基づいて直接的・具体的な体験を通じて人格形成の基礎となる豊かな「心情」を育み、心を揺り動かし、物事に自分から関わろうとする「意欲」や、健全な生活を営むために必要な「態度」を培い、様々なことを学んでいく。

そのためには、保育者は日々の保育を振り返りながら子どもの発達や内面の理解を進め、子ども一人一人のよさや可能性等を把握し、評価・指導の改善に生かしていくことが大切である。

子どもの姿を多面的に理解するためには、現時点だけではなく、発達の「時間軸」としての連続性に留意すると共に、家庭や園との社会的な「環境軸」としての連続性も念頭に置く必要があるであろう。

さらに、保育者は子どもとの温かい信頼関係を築くことが大切である。信頼関係を育むことで子どもは本来の姿をあらわし、さらに能動性を發揮していく。その主体的に活動する姿を受け止め、子どもの思いや心情に気づくことが大切である。

また、OECD諸国の中で日本の子どもの自己肯定感が低いと指摘されていることについても、今日的課題として認識しておくことが必要である。

子どもが遊びや生活の中でどのような興味を持ち、そこにどのような意味があるのかを理解することも大切である。そのためには、遊びや生活が子どもの内面的な成長にどのように関係するのかを、様々な記録を通じて理解するようにしたい。

発達の道筋のたどり方には、その子らしい特性がある。また発達の様々な面には相互関連性や個別性がある。このことを充分に理解して、子どもの姿を様々な角度から多様な方法で多面的に捉えることが大切である。

子どもがどの方向に育ってほしいかを洞察する眼をもつと同時に、幼児期を中心に、乳児期から児童期への育ちの連續性を視野に入れ、保育者間で子どもの育ちの共有を図り、保護者や関係機関とも成長の道筋を共有できるように努めたい。

そのためにも、幼稚園教育において育みたい資質・能力の3つの柱「知識・技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力・人間性等」をベースにして、「5領域」を踏まえたうえで、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を子ども理解と共有の手立てとしたい。

このように子どもを理解するためには様々な観点から子どもの姿を見つめることが大切であるが、特別な支援を必要とする子どもの保育にあたっては、深い子ども理解が特に不可欠である。子ども一人一人の感性や興味・関心の方向を省察し、発達の姿を見通し、どのような保育を展開していくべきかを充分に検討したい。子どものあるがままの姿から保育を考え、家庭支援並びに地域の学校や関係機関との連携も視野に入れながら、園全体でインクルーシブ教育にどのように取り組むか検討することも大切な視点であろう。

【研究・研修の手がかり】

- ① 園における子どもの遊びや生活の中で、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、具体的にどのような場面で見られるか協議し合う。
- ② 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置きながら、子ども一人一人が発達に必要な体験を積み重ねていくための環境や援助について考える。
- ③ 保育の記録、活用、振り返り、指導の改善について考える。
 - ・記録方法の研究（写真や動画等のドキュメンテーション、ポートフォリオ、個別記録、保育記録、エピソード記録等）
 - ・活用方法の研究（日々の連絡や相談、研修、保護者との情報共有等）
- ④ 子ども理解を深め、教育実践の質を高めていくための、園内研修の在り方を考える。
- ⑤ 子どもとの信頼関係を築き、温かい雰囲気の保育を構築するためには、保育者のどのような取組みや働きかけが必要かを考える。
- ⑥ 園内だけでなく、家庭や小学校、関係機関等との連携・ネットワークを構築し、子どもの育ちを「点」（個人・園）と「面」（家庭・地域）と「線」（乳幼児期～児童期以降）で共有し、支えていく方法を考える。
- ⑦ 特別な支援を必要とする子どもの理解、指導に当たっては、家庭や関係機関と連携し、個別の教育支援計画や指導計画を作成し活用することが大切である。各園での事例をもとに、配慮すべきことや課題について考える。

保育実践

(研究・研修のテーマ例)

- 幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領改訂の理解
- 遊びが充実するための環境と教材研究
- 子ども理解に基づく教育課程の編成や指導計画の作成
- 主体的・対話的で深い学びの実現
- 園行事の取組みと子どもの育ち
- 子どもと共に環境を作り出す
- 一人一人の発達の特性に応じた指導
- 保育のプロセスがみえる記録の工夫
- 記録を活用するための仕組み作り
- 園におけるPDCAサイクルの確立
- 各地区独自の課題

■研究・研修の視点

保育実践は、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の正しい理解と各園の教育理念を基盤として、子どもの姿に応じながら組織的、計画的に行うものである。幼稚園教育要領の改訂では、幼稚園教育において育みたい資質・能力として、「知識・技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」、「学びに向かう力・人間性等」の三つが示されている。これらは、各幼稚園等が子どもの発達の実情や興味・関心等を踏まえながら展開する活動全体によって育まれるものである。幼児期にふさわしい遊びや生活を積み重ねながら、これらの資質・能力を育んでいくためには、保育者としての専門的な知識・技術を磨くことが重要である。例えば、子どもの遊びが充実していくような豊かな教育環境をつくり出すために教材研究を行ったり、子ども一人一人への適切な指導について学んだり、記録の方法を工夫したりすることはとても大切である。そして、それらを毎日適切に行っていくための方法や仕組みを考えていくことが、日々の保育の充実につながっていく。

幼稚園等における保育実践は、幼児理解に基づく指導計画の作成、環境の構成と活動の展開、保育者の援助、評価に基づいた新たな指導計画の作成といった循環(PDCAサイクル)の中で行われるものである。指導計画の作成では、一人一人の発達の実情を捉えた上で、具体的なねらいや内容を設定し、それらが達成されるための適切な環境を考えていく必要がある。そして、環境に関わって様々な活動を生み出していく子どもたちの姿を捉えながら、保育者はその状況に応じて多様なかかわりをしていくことが求められる。保育の評価は、子どもの発達の理解と保育の改善という両面から行なうことが大切であり、それらは子どもの育ちの姿と保育プロセスの記録に基づいて行われる。これらの評価を生かして指導計画を改善していくことは、充実した生活をつ

くり出す上で重要である。保育の振り返りと評価にあたっては、保育者個人での省察と共に、保育者間の保育カンファレンスが重要である。多様な視点での意見を互いに受け止め合うことによって、保育者間の同僚性が醸成され、園全体の保育の質の向上につながっていくと考える。

【研究・研修の手がかり】

- ① 自園の建学の精神、教育・保育理念について保育者間で理解を深め、保育の中で具現化していく方法を考える。
- ② 「幼児教育において育みたい資質・能力」の三つの柱や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえながら、自園の教育課程を編成し、実践、評価、改善していく方法を考える。
- ③ 子どもの発達に即した主体的・対話的で深い学びとはどのようなものであるか、具体的な事例を通して協議する。また、それらの主体的・対話的で深い学びが実現するための環境構成や援助について考える。
- ④ 教材がもつ意味や子どもと教材との関わりについて理解を深め、子どもの主体的な活動としての遊びが充実するための環境を考える。
- ⑤ 0, 1, 2歳児の家庭及び施設における育ちと、満3歳以降の教育・保育との連続性について考える。
- ⑥ 乳児保育、預かり保育、学童保育等、様々な保育形態があることを学び、園の状況に応じた全体的な計画を考える。
- ⑦ 様々な記録方法の特徴を理解し、幼児理解や保育の改善に生かすための記録の工夫について考える。
- ⑧ 幼児期にふさわしい評価の在り方や、評価を保育の計画、実践の改善につなげるための仕組みを考える。

子どもが育つ家庭や地域

(研究・研修のテーマ例)

- 幼児教育と小学校教育の円滑な接続
- 保護者や地域・社会との連携・協働
- 子育ての支援としての「預かり保育」「親子登園」「子育て相談」の在り方
- カウンセリングマインドを活用した教育・育児相談
- 地域の資源を活用した保育の在り方
- 各地区独自の課題

■ 研究・研修の視点

現代社会において、高度情報化が進み、子育ての情報をスマホから収集する親が散見されるようになってきた。また少子高齢化、社会のグローバル化の進展等社会的環境が大きく変わった中で、子どもたちを取り巻く環境も大きく変化してきた。子どもたちの育ちに、生活習慣の未確立、コミュニケーション能力の低下、愛着障害等多くの課題が指摘されている。

一方地域では人々の地縁的な意識が薄れ、地域の一員としての大人たちの関わりが減り、子ども同士の交流の場も少なくなってきた。総じて、子どもたちが安全に安心して生活できる環境を整えるのが難しくなってきた。また、家庭においても核家族化、少子化が進む中、一人で悩みを抱える母親が孤立してしまうことも深刻な問題になっている。

こうした課題に対して各園では様々な子育ての支援に取り組んでいる。親子で参加する「未就園児の親子登園」「0・1・2歳児の子育ての支援」また幼稚園という教育の場を活用して、保護者同士の交流を目的とした事業、子育て相談に応じる等、子育て情報を提供するといった活動を通して、地域における幼児期の教育センターとしての役割を果たすことが期待されている。

また急激な少子高齢化の到来が危惧されている。その背景には、若い世代の未婚化、晩婚化そして晩産化の進行が指摘されている。そこには社会の近代化と共に、女性が仕事をもつことの充実感や生活の安定への希求がある。女性の社会進出に伴い、就労する母親も増えてきたことから、幼稚園においてもほとんどの園が「預かり保育」を実施している。教育時間後に希望者に対して行う預かり保育は、長時間になるため、子どもの心身の負担を考慮し、子どもの生活リズムや生活の仕方に十分配慮した計画を作成することが必要となる。また子どもが健康で楽しく生活できるように保護者との連携を密にすることが大切であり、その結果保護者が幼稚園と共に子どもを育てるという意識をもつことが望まれる。

このように子育ての支援をするうえでは、幼稚園・認定こども園は、子どもの育ちを知るために、0歳からの発達を理解する必要がある。また小学校就学前までの特別なニーズを持つ家庭の保護者に対しての育児・教育相談の知識も身につけていかなければならない。他にも子どもの貧困、児童虐待、DVといった課題も浮かび上がっており、地域のネットワークを活用した支援体制を整えていく必要がある。

小学校との連携については幼稚園教育要領の改訂により、幼児教育と小学校教育の

接続が重要視され、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえ教育課程を編成し、幼児教育と小学校教育の共通理解を図るために、教師との意見交換や合同の研究会を設け、円滑な接続を図るように努めていかなければならない。

また小学校、中学校では、地域の人的資源を活用するコミュニティー・スクールが推進されている。子どもの育ちは学校の教師による教育だけでなく、家庭における親子のふれあいや友達との遊び、そして地域の人々との様々な関わりを通して育まれるという考え方から幼稚園や認定こども園でも、地域の中での、人的教育力を活用し、体験的に活動できる場やプログラムを研究して行く必要がある。また地域と連携し総合的に教育を進められるような仕組み作りが強く求められている。

子どもが育つ家庭や、地域の現状を学び、その力を園の保育に取り入れながら、地域社会と連携した地域に開かれた幼児期の教育センターとしての役割を果たしていきたい。

【研究・研修の手がかり】

- ① 地域と連携し総合的に教育を進めていくための仕組みをどう構築していくか考える。
- ② 家庭の現状を知り、支援を必要とする保護者に対しての育児・教育相談の手法を学び、どのような援助ができるか考える。
- ③ 教育時間終了後に希望者を対象に行われる預かり保育では、子どもの心身の負担や生活リズムを考慮し、どのような計画を立て実施しているか協議し合う。
- ④ 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を小学校の教師と共有するためにどのような機会を設けたらよいか考える。また、その際、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をどのように活用することができるか考える。

特別分野

(研究・研修のテーマ例)

- 教育環境の質を考える
- 社会に開かれた教育課程
- 学びの過程を考える
- 5歳児が幼稚園・認定こども園にいることの意味
- 非認知的能力を育む
- 幼稚園等におけるカリキュラム・マネジメント
- 園内研修の継続と充実
- アクティブラーニングにつながる保育
- 幼児教育アドバイザーを担うECEQコーディネーターの人材育成
- 各地区独自の課題

■研究・研修の視点

特別分野は、課題1から課題6に記述されているものと一部では重なりながらも、特に現在から今後の保育を考えたときに検討していくべき今日的課題を示した。

平成29年3月に新しい幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が告示され、幼児教育の重要性の認識と共に、さらなる幼児教育の質の向上が求められるようになった。幼児教育の質を高めるためには、一人一人の育ちを支える、乳幼児期の保育にふさわしい豊かな環境について、研究することは極めて大切である。特に、今まで行ってきた自分の保育を振り返り、様々な視点からの意見を取り入れて保育環境を改善していくことが幼児教育の質の向上につながると考えられる。単に自分で考えるのではなく、園全体の保育者が「チーム幼稚園・チームこども園」として、連携・協働しながら質の向上を目指していくことが必要である。チームの同僚性を高めるファシリテーションは、日々の保育の振り返りや園内研修において有効なスキルである。また、保育における「主体的・対話的で深い学び」の実践においても、保育者の子どもへの関わりが重要となってくる。また、幼稚園・こども園での最年長である5歳児の育ちについても実践研究を重ね、5歳児が幼稚園・こども園にいることの意味を今一度検討することが大切である。そして、子どもの発達や学びの連続性を踏まえて、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえながら、それらと小学校の各教科等における学習との関係性を整理することが必要であると考える。最近、感情のコントロールや粘り強さ等の非認知的能力を育むことの重要性や、課題を発見し、その解決に向けて主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）の充実が指摘されている。

また、今後ECEQコーディネーターが各地の幼児教育アドバイザーとしての役割を担い、幼児教育の質の向上をめざしていくことが考えられるので、その人材育成も大きな課題となる。

そしてこれからも私立幼稚園が独自性を見失わずに公としての教育を担うことを念頭に置きながら、幼児教育の質の向上を目指した、学校評価の在り方についても研究していきたい。

【研究・研修の手がかり】

- ① 教育環境が子どもの発達にどのような影響を与えていたか、動画や写真、エピソード等の記録をもとに、様々な視点から研究協議する。（ドキュメンテーション・ポートフォリオの活用方法）
- ② 集団教育の中での5歳児の育ちや異年齢の子どもに与える影響等について具体的な事例をもとに協議し合い、幼稚園やこども園に5歳児がいることの意味について明確化する。
- ③ 非認知的能力を育む教育を考え、それを充実していくための園内研修をより実効性のあるものとするために、研修内容や方法について検討する。自分の保育を振り返り、明日への保育につなげるための内省と対話について考え、同僚性を高めるファシリテーションについて協議する。
- ④ これからの中学校教育で重視されている主体的・対話的で深い学び（アクティブーリング）の視点について理解すると共に、小学校以降の学習につながる幼児教育の在り方について研究協議する。
- ⑤ 今後幼児教育アドバイザーを担うことが期待されるECEQコーディネーターの資質の向上のための研修を考える。